

総務の袴田君が実は肉食だった話聞く!?

第一章 それは総務の袴田君

絶体絶命って四字熟語は、アニメやマンガの主人公が窮地に追いやられた時に使う言葉だと思っていた。目が覚めて、私はその「窮地」という見知らぬ土地に立っている。

こんな二十七歳の、出るところ出てない平凡OLの私が使う言葉じゃないと思います、神様!!
ねえ神様!! 教えて?

ここはどこ!? それで隣で私に背中向けて寝てるこの人は誰!? そんなでどうして部屋がこんな汚いの? 泥棒にでも入られたの!? あの山は何? ゴミ? 貝塚? え、じゃあこの人古代人? 背中見てもまったく答えは出さず! とりあえず頭痛いから、眉間もみもみ。しかも裸。繰り返し、しかも、私も男も裸なのである。事後みたくなくなってしまっているのである。下着は着けてたからベッドから下りて、落ちてた服そと取って、音立てないで着た。

いや、ちょっと待てよ、もっかい寝て起きたら家のベッドだった的な、ミラクルな現象に.....

なんないから。サッと寝て起きてみたけど二度手間!!

過ちは過ちだから、どうかしないとすよね。もういい年した大人ですからね、現実逃避はよ

くないですね。

男は寝息だけを響かせて、とても気持ちよさそうです。時刻は午前五時です。

吹き出物が一切ない、男の綺麗な背中をじっと見つめてたら選択肢が浮かんできた。

【何食わぬ顔で彼女面してみる】

【見ぬふりならぬ、なかったことにする】

【消す】

【悲劇のヒロインぶって泣いてみる】

【消す】

【もっかい寝る】

待つて待つて、不穏な選択肢が二回も出てる！

ちよつと周り見渡したけど……うーん武器になりそうなものは……いや、こんな汚部屋おべやの何も触りたくないな。そうなると武器は……

自分の両手を見てワナワナしてしまった。こ、これは武者震むしゃやぶるいよ……！ この無防備な状態なら、女の私でもできるはず！！

い、いや、やめとこ！ 勢いでお母さんとお父さんの涙を見たくない！！

それである……本当に誰だこの人。私は彼と昨夜何をしてしまったんだ、全然思いつけないけど……！

昨日の夜は………確か会社の飲み会だった。

はい記憶終了。

ヤバくない？ それしか覚えてないよ……記憶飛ぶほど飲んだっけ。

でも、ちよつと待つて。この黒髪もしかして……

あれ？ もしかして……

いや、ごめん。

全然思いつかないんだけど！

でもよ？ もしも営業のまあまあイケてる社員様だったら、ラッキーじゃないですかね、これは！

最後にちよつと、ちよつとだけよ？

お顔見て帰つてもよろしいかしら？ 場合によっては朝ご飯作つて、彼女面かのじよめんしていいかしら？

神様お願い、桐生きりゆうさん（営業トップ）！！ 神様お願い桐生さん（営業トップ）！！ 神様お願い桐生さん（営業トップ）！！ 桐生さん（営業トップ）！！ 桐生さん（営業トップ）！！ 営業トップ！！

ベッドに乗つて顔を覗のぞきにいったら……

「んっ……」

まさかの艶つやっぽい声を出しながら黒い頭が揺れて、家主は私のほうを向いた。

うおおおおおおお!!!

袴田君はかまたかああ………!!!

まあ、髪と体格から桐生さんじゃないってことくらい、わかつてたけどさ！

うわあ……総務の袴田君………ええええええ、話したことないいい。
えっと、待って……は、袴田君の情報は……総務で……二年前に会社に来て……うん、それ
だけ！

でもあの……寝息を立てる袴田君は思ってたより綺麗な顔してる……会社では草食眼鏡めがねって感じ
なのに……え？ この人にいろいろさね……？

う、う、う！！

はい解散!! 撤収!!!

「お先に失礼します」

超小さな声で言っただけ荷物を持って、私は一目散に袴田君の部屋をあとにしたのだった。

とりあえず家に帰って二度寝した。今日土曜日でよかった。

昼過ぎに起きた頃には頭もスッキリしてたし、見慣れた部屋での目覚めは最高だった。紅茶でも
飲む……

ポットのお湯が沸くまで、スマホを弄いじってみる。友達からメッセージが来てるくらいで、特に変
わったことはなかった。

袴田君の連絡先も入ってなかったし（よかった）、もちろん桐生さんの連絡先も入ってなかった
（くっそ）。

うんだって、本当に何もなかったしね☆ うふ。

マジ、あれ夢だったんじゃない？

と覚えてきた………ああ、うん夢でいいや。

お湯が沸いたからティーポットにお湯を注そそいで蓋ふたをして、蒸らす間、今度は郵便物を眺めてみた。
近くにできたジムにピザや寿司、マンションやスーパーのチラシ………それと、区だより………

「あ」

尾台おびえ絵夢む様。おお、やっと私宛の郵便物だ。そして、そのハガキに溜め息なんて出てしまった。

「ああ………そう、夏奈か子な結婚したんだ。オメデト」

苗字みなじが変わった大学の友人からのハガキの裏には、結婚式の写真がプリントされた。しかも何
これハワイ？ 海外挙式？ 呼ばれてないけどあれかな、身内だけでやったのかな。だって夏奈子
仲良かったから呼んでくれてるはずだし。

え、仲良かったと思ってるの、私だけパターン？

結婚するほどの恋人がいたって知らなかったし、最後のやりとりはお正月だったかな？ 年賀状
のやりとりはしたよね、ん？ 仲………良いよねえ？

………うっそやだ、やめよ！ やめよ！ い、忙しかったんだよきつと！ うんそう！

携帯持って、やっぱり置いて。ハガキ来たんだから私もお返事書いて、何かプレゼントでも贈ろ。
紅茶一口飲んだ………うわ、すっぱ!! ああこれハイビスカス入ってるんだっけ、すごい酸すっぱっぱ
い。でも、いつもより酸味五割増しくらいに感じる。

ソファに座って窓を見た。雲一つないカラッとした晴天で、それなのに洗濯物すら干してない
ベランダって………

ヤバイな、この世界に一人ぼっち感ヤッバイ！ でも特に予定もない！
だがしかし寂しくもない私、最強!!

結婚したいな〜とは思わないんだけど、結婚したいくらい好きな人いるのは、いーなーと思う。
結婚したら、今まで一人で使ってた時間を他人と共有しなきゃなんないわけで。好き勝手にできな
いし、ズボラな姿見せて幻滅げんめつされてもやだから、常にちゃんとしなきゃならないよね？

そんなの耐えられない！ って思うんだけど、きつと違うんだよね。

だって、ずっと一緒にいたいくらい好きな人だから結婚するんだもんなあ。
共有しなきゃいけない、とかそういう気持ちじゃないんだ、きつと。私のことわかってもらいた
いし、相手のこともわかりたい。一緒にいるのが楽しくて楽しくて仕方ない。そんな相手だから結
婚するんですよ。

いいなあ。そんな人、出会ってみたいなあ。

でも私まだ彼氏いない歴〓年齢だしな。

……………ああ、そうか。

すごいことに気がついて、顔を両手で覆おほった。

私は記憶もないまま乙女散らしちゃったって!? 袴田君で!?

ないないないないない!

うん、ない!

なかったことになってるからノーカンです。

いやでもさ、『わたくし殿方のために初めては温めておきましたの。キラツ☆』とか今時重たい
よね？ 金曜日だしたまにはワンナイトラブもいよいよね！ みたいな感性がなかったから、処女拗こ
らせたわけだし。

うん、だからこれでよかったのよ!! だって私はもう二十七歳の立派な大人（涙目）。

泣いてないです！ これはあれ、生き別れの弟を思い出しただけよ（姉しかいない）。

そして私は何もせずに……………いやゲームして大好きなTL漫画読んで（調教と服従で検索する）、
土曜日を終えてしまった……………現実逃避ではないです、現実から逃避なんて不可能ですから。

そして迎えた、日曜日。まあ目立ったイベントもないもんで。

いつもどおり、午前中はヨガに行く（いろんな体位ができるよう柔軟な体作りを心がけてまっ
す！ ちなみにこの体を使えそうな予定はなし。いや使ったのかな……………うううう、助けて）。

レッスンを終えて、毎週会う、同じようなアラサー独身の顔見知りたちに挨拶あいさつする。ヨガスタジ
オのシャワー浴びたあと、なんだか最近、化粧のりが前と違うんだよなあって化粧水パッティング
しながら思った。

入れ！ 入れ!! 私の角質層かくしつそうの奥深くまで染み込め化粧水!! 多分、皆もそう思いながらやって
るはず……………!

鏡を見て、全然綺麗になくなって溜め息だ……………エッチすると綺麗になるんじゃないのかよ、
神様嘘つきすぎ!

そこには四流私大卒、二十七歳、営業事務の冴さえない私が映っていた。

勉強得意じゃなかったけど大学行けて親がうるさかったから、行けるとこに行った。得意なものもない。

顔は普通。インパクトはないけど、顔のせいで人を不快にさせたことはないかな。化粧したら化けると無責任に言われて、本気で化粧したら歌舞伎役者みたいになったから、いつもナチュラルメイク。

体形は………食にこだわらないから普通。

髪は伸ばしてる、輪郭隠せるから。前髪は作ってない、風吹くたびに直すの面倒臭いから。

笑顔は頑張ってる、こんな私が無愛想にしてたら救いようがないから。

背筋は伸ばすようにしてる、少しでも印象をよく見せたいから。

話はしっかり聞くようにしてる、私は面白いことが言えないから。

何に対しても否定しないようにしてる、私が否定されるのが怖いから。

そして、私みたいのを陰キャラ、通称『陰キャ』と言うらしい。

へえ悪くないな陰キャ。実は陰でクラス操ってそうじゃん、私には全然そんな能力ないけど。

趣味は………実はこないだまであったけど、卒業した。

それは時間が経つにつれ、ゆっくり黒歴史になりつつある。もう絶対あの世界には戻らないんだけど、未だに段ボールに入ってるその痕跡が、なかなか捨てられないでいる。

……まあ、そんなことを考えてもしょうがないんだけどね。

さっとパウダー叩いてヨガスタジオを出た。

午後は一週間分の買い物だ。

会社帰りにちよっとコンビニ、くらいはいいけど、スーパーまで寄るのは面倒臭いし、それから帰って料理なんてやってらんない。

でも毎日外食したら安月給OLの私じゃ有料ゲームできなくなってしまうから、節約するに越したことはない。

だから食材をまとめて安いスーパーで買って、日曜に作り置きしてる。

今日も何作ろうかなーっていろいろ買って帰ってきて、狭い玄関を通ろうとしたら、置いといた段ボールにつまづいて舌打ちしてしまった。

段ボールが倒れて、中からウィッグと衣装が投げ出される。

………見なかったことにして部屋に入った。これが私の黒歴史。

趣味は………多分二年前に聞かれたら、笑顔で「コスプレです！」って答えたかな。

すごいんだよ？ 陰キャラの私が、本当に魔法にかけられたみたいに変身できるんだ！

テーピング使ったら骨格も変えられるし、たくさん持ってたメイク道具で、好きな顔になれた。

服だっ作ってた。すごい楽しかった。

生まれ変わったような瞬間が快感で、このために生きてるってレベルだった。

カメラのフラッシュが気持ちいいんだ。ファンだっっていっぱいいたし、私しか撮らないって言ってたカメラマン様だっっていたんだからね。

“にゃんにゃん”って痛い名前だったけど、私がやるポーズは“にゃんにゃんポーズ”って流行っ

たりもしたんだよ！（うん、恥ずか死ぬる）

でも、私を師匠師匠って崇拜してくれてた子に、SNSの裏アカアカウントで【いい年して魔法少女とか、マジでキメエ。さっさと引退しろ】って陰口言われてるの見て、やめてしまった。

その子、私より一回り若いんだけど、他の人もそう思ってたらどーしようって、いたたまれなくなっちゃってな！

裏アカ見た瞬間は悲しかったかな？ 怒りとかはなくて、はぁマジかって溜め息ついて、私にまつわるすべてのアカアカウントを消去した。

メイク教えてあげたり、一緒に服作ったり、妹みたいに思ってたんだけどね。何か気に障ることでもしちゃったのかな。今となってはわからない。

まあ、あのままやってても引き際がわからなかったし、これでよかったんだと思う！

思い入れのあるキャラクターだったから、どうしてもやりたくてね。でも、いつまでも魔法少女だなんて、私がおかしかったんだ。

年齢に応じたコスプレってあるんだけど、まだ今年ができるんじゃないかなって無理してやってたのも事実、キモイって言われてたのが現実。

誰にも何も告げずに、にやんにやん氏は突然消えていなくなつて……………

そのままあの世界には、まったく触れてない。けれど後悔はしていない。

冷蔵庫に食材をしまつて、一週間の大体の配分考えながらちよつとした夕飯を作つて食べた。明日のお弁当の下拵えも済んだし、ゲームして寝よ寝よ。おやすみなさい。

で、月曜日。さらに一日経ったら金曜日の袴田君なんかすっかり忘れていた。

我ながらなんだよこの性格は、と思う。

ただ、世間で言う『さとり世代』な私は、ネガティブなことがあつても「仕方ない」で済ませるように、脳が勝手に働いてしまうんだよね。生まれた時から大変な世の中だったし、みたいな。

だつてもう、やつちやつちものは仕方ないじゃんか。

落ち込んだって愚痴零したって励まされたって、結局私が立ち上がらないといけないわけで。

だつたらはじめから悪いほうに捉えなければ万事解決っしょ！

起きて、顔洗つて、さあメイクくメイクくって思つたら……………

う、う、う、嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘！！

うっそでしょ!! メイクポーチがないんだけど……………!

え？ 嘘、なんでなんぞ？

休みはちよつと眉描くのとパウダーくらいだから、家にある予備ので済ませて、気づかんかつ

た……………

やだ、落とした？ 落としたのかなあ。

コスプレやめてから、私の楽しみといえば、新作のコスメ買ってニヤニヤすることだったのに！

（結局使わず誰かにあげる）

百貨店のカウンターでお姉さんにお化粧してもらつてお話しして、買って外までお見送りしても

らうの大好きで、給料注ぎ込んで二十七歳。

あのポーチこの夏限定のだったし、中身あわせて総額五万くらいしたんだけど………ショック。いや、落とした私が悪いんだけどさ。

まあ、しょうがないか。神様がこれを機にプチプラコスメにしなさいって勧めてんのかもしれない。ああそうですか、そうしますよ、私の顔はプチプラですね。

……ん？ あ？

ちよつとやな予感する。

もしかして、もしかして神様。袴田君の家に忘れてきたなんてこたあーないですよ？

だって、袴田君ちなんて行ったことないし！

パスケースも財布も入ってたから、バッグの中身あんまり確認せずに帰っちゃったんだよなあ。

えー……袴田君ち？

うわああ……マジですか。

とりあえず、ここでウダウダ考えても仕方ないし、予備のメイク道具でそれなりに顔作って、会社行くか。

メイク終わらせて家を出て、電車乗って会社に着いて、いつもどおり制服着替えて、皆にニコニコ尾台です！

私は始業の三十分前にはデスクについて、着替えもあるから会社には一時間前には来てる。営業さんのスケジュールチェックしたりお花にお水あげたり、ゴミ出しもしなきゃいけないから。私

が好きでしてることだけどね。それ全部終わらせたなら、営業さんがデスクに来た。

「尾台さん、新しい商材の顧客向けの資料作ってもらっていいかな。ちよつと急ぎで」

「はい、わかりました」

パソコンのキーボード打つ手を止めて、笑顔で封筒を受け取った。中身取り出してデータ確認する。ああこれなら前に同じような資料作ったからフォローアップがあるな、と頷いた。

私の働いている会社は、株式会社グロリアス・デイズ・カンパニー、通称GDC。各地にある映像制作会社と動画サイトやテレビ局などを仲介する、映像の代理営業を主な事業としている企業だ。会社の場所は御茶ノ水で、建物は古め。うちの会社の名前だけ言われても皆「？」って感じだろうけど、親会社は株式会社三神企画って聞けば、誰でも「おおっ!!」と驚くのさ。

三神企画は世界累計利用者が四千万人を突破したアプリゲームの開発に、若者に人気の動画配信サイト運営、映画の配給に……と、幅広くエンターテインメント事業を展開している超有名、優良企業だ。

会長がテレビで特集されたこともあるし、就職したい企業ランキングでも常に上位をキープしている。

まあ、私が働いているのは、その子会社の営業事務ですけどね。でもうちの会社もずっと黒字経営なんだぞ。

仕事は特別できるほうではないけど、社員同士仲が良いし、フォローしあえる関係だから、手一杯で連続深夜残業って日はない。

まあ仲が良いのは、一人を除いてだけど……

「尾台さん、こっちのファイルのチェックもお願いな」

さあ資料を作ろうと思ったらデスクにドサツとファイルを置かれて、二時間はかかりそうな量に笑顔が固まる。

「え……」

「私、大事な用があるから、午後までには済ませておいてちょうだい」

「でも、ちょうど今……」

「はあ？」

そう。私を威圧的な態度で睨む、この葛西さんという営業事務のお局が、ちよつと曲者。

初めて会った時の葛西さんは、それはもうやりたい放題で営業部を牛耳っていた。

気分次第で仕事をしたりしなかったり。機嫌が悪い時は誰も話しかけられない。お昼休みは時間どおりに帰って来ないのは当たり前、しかもそのお昼ご飯代を部下の個人指導とか適当な理由をつけて、領収書切った。備品も勝手に持って帰るし全然ルール守らない人だったんだけど、会社の創業時からいる人で社長にも顔が利くから、誰も何も言えなかった。

気に入らないことがあれば、周りに当たり散らすし、小さなことでグチグチ……

まるで、ドラマの悪役のような人だった。

右も左もわからなかった五年前の入社時、私は葛西さんの下につけられた。初めて会った時、葛西さんは私を頭の前から足の先まで見てこう言った。

『これは、使えなそうな……ハズレを引いてしまったわ』

いやな顔をされると反射的に「すみません」や「ごめんなさい」が出てしまう私は、それからお局の格好の餌食になってしまい、毎日ストレスの捌け口にされている。

そんなんで、堪え性のない私は入社早々、仕事辞めてもいーかなーって思ったけど、わずかながら味方いたし、今は後輩もいるし、ここで私がストッパーになれば他に被害者出ないかも、なんて意地張って今に至る。以前私の席に座っていた人は葛西さんのいびりのせいで三か月で辞めて、鬱々にまでなっただって……何をこんなに我慢する必要があるのって自分でもわからないし、べつにヒーローになりたいわけじゃないけど……

でもそれで営業の人や他の人の手が止まるくらいなら説教くらいって、私が引き受けちゃったりなんかして、本当私ってばか。

まあ、こんないやがらせなんていつものことだから諦めてるけど、今日月曜日か……週はじめは忙しくなるし、時間取られたくないんだけど……

じつと考えてたら、葛西さんがイライラしながら口を開いた。

『「でも」、なんて言い訳してる暇があるなら、さっさと今してる仕事片づければいいでしょう』

「言い訳したつもりじゃ」

「じゃあ何？ 男からもらった仕事だけ受けるって？ 本当に尾台さんは媚を売るのだけは得意ね」

わざとらしく耳元で小さな声で言われて、さっき受け取った封筒をつつかれる。

「そんな」

悔しいようなよくわかんない気持ち……でもここで言い返したら、話が長引いて仕事が進まないだけだし。

唇をぐつと噛んで「わかりました」って言おうとしたら。

「尾台さん」

「ん？」

いつも名前呼ばれたら大体誰だかわかるのに、その声は初めて。視線だけそっちに向けたら……う、嘘!!

「お取り込み中すみません、総務部の袴田です。尾台さんに用があるのですが、ちょっとお借りしても？」

「え、ええ……私はべつに」

突然の袴田君の登場に葛西さんは少し引いてる。そして私はものすんごく引いてる。

「ありがとうございます。ああと……さつき聞こえたのですが、葛西さんの大事な用、とは？俺も彼女に特別な用事があるんです。でも、あなたの用事次第では彼女がこれを終わらせてからでない、俺と話ができませんよね？」

袴田君が長い指で机に置かれたファイルを指すと、葛西さんは慌ててファイルを抱きかかえた。

「終わったら呼びなさいよ」

「はい」

葛西さんは逃げるようにその場を去って、袴田君が残って……え？ 助けてくれ……？ え？ えええ？

二人で葛西さんの背中を見送っていたんだけど、袴田君は眼鏡を押し上げながらすぐに私のほうを向いた。

「それですみません、尾台さん。これ……ちよつと確認してもらってもいいですか」

「ひッ!!」

一歩距離を詰められてビビる。つていうか何？ なんで袴田君こつち来んの!? 怖い!!

「大事な用です」

「え？ 確認つて、なんで私？ えっと、そのあの、あ、あのおはようございます」

「おはようございます。はいこれ、目を通してもらっていいですか」

また一歩詰め寄せられた。眼鏡がキラッと光ってる。

袴田雄太、二十八歳。

そう。あの、起きたら隣にいた総務の袴田君だ。

目が隠れそうな癖毛の前髪、さらにはその目すらも見えなくする黒縁の眼鏡。眼鏡のブリッジの下には高く筋の通った鼻がある。唇は薄いピンク。

あ、背高い、それで白い。初めてちゃんと正面から見たな、総務の袴田君。

正直こう、性の匂いが弱い感じの、T H E草食系なんだけど、そんな方が……私と……裸で……

うわわわわああ!!

皆が袴田君袴田君言うから存在だけは知ってたけど、こんな近くに来られたのは初めてだ。黙っていたら、袴田君は脇に挟んでいた書類を私の前に出して、静かな声で言う。

「これ……」

「あ、はい！ すみませんなんですしよ」

左上がクリップで綴じられた書類を押しつけられて、見てみれば付箋が貼られて。受け取ってからそこに書いてあった言葉を読んで、息が詰まった。

【なんで勝手に帰ったんですか】

「!!!」

ヤバイ！ 汗、汗出てくる！

袴田君、直立不動の姿勢崩さず！ 答えらんないから次のページ次のページ!!

【好きです】

無理！ 次！

【責任は取ります】

なななん、なんの話!? 次！

【結婚しましょう】

しません!!

「はははははきやまだ君！ これはちよつとダメだと思えますよ!! 相手の意見がまったく考慮されてませんし一方的すぎます！ もう一度見直………いやいやいや、なかったことにしましよ

う！ それがお互いのためです!!」

て言つて、お腹に書類を突き返す。

「それこそ一方的すぎます」

袴田君は書類を顔のとこまで持ち上げると、最後の二ページをめくって見せてきた。

【探しものは俺の家にありますよ】

はい、終わった。

私を真っ直ぐ見て微動だにしない袴田君の前に、口から魂出していたら、私の席の後ろのほうから声が出た。

「袴田くん!! はーかーまーだーくん！ まーた俺のパソコン動かなくなっちゃったよー袴田君ー!!」

袴田君はピクツと体を反応させて声のするほうを見ると、眼鏡を直した。

「何したんですか」

落ち着いた声で返事をして。

「何もしてないよ?」

という、とぼけた答えにも淡々と答える。

「何もしてないのに止まるわけじゃないでしょう、何しようとしたんですか」

「え? 書式を変えようと思ってあそこのアレのアレを押ししてみたんだけどさー」

「やっぱりしてるじゃないですか、今行きます。では尾台さんまた」

あつさり頭を下げて去っていく袴田君。私もその背中に頭を下げた。

「え？ あ、はい。さようなら（永久に）」

袴田君はこいこいされてるほうに行つてしまつたよ……

私は気を取り直して仕事再開。

毎日至るところで聞こえる「袴田くん」の声。袴田君はいつもいろんな人に頼られている。

総務部つて会社によつて請け負う業務の範囲が違ふと思うんだけど、うちの会社の総務部は、なんでも屋みたくなつてる。

皆、口癖が「じゃあ総務に聞くか」とか、「なら総務に頼むか」になつてて、なんでも総務総務言つてる。まあそれも、袴田君が来た二年前からの話だけだ。

チラツて遠ざかつていく背中を見ていたら、高い声が聞こえて後ろから首に抱きつかれた。

「えつたーん!! 本っ当にあのクソババーどうにかならないのかな、殴りたい」

振り返るといたのは、茶髪のマッシュボブのめぐちゃんこと久瀬恵。仕事もできるし、顔も可愛いバイトの子。私の下で働いてくれている。初めて指導してあげてつて言われた子だから、誰かにめぐちゃんが褒められると私まで嬉しくなる。

まあ見た目は私とは対照的だから、仕事以外だと立場が逆転しますけどね、めぐちゃん彼氏いますし。

めぐちゃんは二十四歳だから年も近いし話しやすいし、このまま正社員になつてうちで働いてくれないかなーつて思うくらい気が合う。

めぐちゃんは私を「えつちゃん」つて愛称で呼ぶほど仲良くしてくれるし、いつも味方してくれるのは嬉しいけど、今日はちよつと荒ぶるすぎてて苦しい。

「そういうのすぐ言つちゃダメだつてば」

「だつてムカつくし。そろそろ一言言つてもいい？」

「ダメ、そんなことしたらクビになつちゃうよ？」

「だつてさあああ!! ……………まあわかつたよ。で？ なあーに、えつちゃん！ 袴田君と何かあつたの？」

「ヒツ!! んんん……………何かあつたんかな、めぐちゃん」

首から離れためぐちゃんは少し不満の残つた顔でこつちを見た。

「なーに？ 自分のことつしよ」

「あの……………えつと……………うん」

ちよつと沈黙…………

やっぱこのままじゃいかんよな！ でも、袴田君のこと、自分じゃどうしていいかわからないし……………飲み会……………こないだのこと、まずはちゃんと出しなさいと。そうだ、はじめはめぐちゃんと一緒に飲んでたはず。

よし！ 心を決めて、いつも知らんぷりしてる飲み会の席での私の姿を聞いてみようかな。下向いて深呼吸して、キリツてして顔上げてみた。

「あのさ……………」

「ん？ えっちゃん？ どった？」

「君が行きたいって言ってたお店、予約してみたんだけど今夜一緒にどう？ 僕に優しくエスコトさせてくれない？（イケボ）」

「やだ〜朝からイケメンが誘ってくるんだけど〜。行く行く〜」

「新橋の立ち飲み屋でいい？」

そのままの調子で言ったら、ふんと顔を横に向けられてしまった。

「そこ予約いらんし。帰りまで時間あるんだから、写真映えしそ〜などこ、ちゃんと探しといてよね」

「はい喜んで」

急ぎの資料終わらせて昼休みにお店決めて（ちよっとおしゃれな、チーズたくさんある店）、午後葛西さんのファイルチェックやってたら仕事終わらなくなって残業。でも、いつもさっさと定時で帰っちゃうくせに、めぐちゃんが手伝ってくれた。

「ありがとう！ めぐ様」

「いいよいよよ！ もっと大きな声で私の好感度上げてくれていいよ！」

「仕事！ 手伝って！ くれて！ ありがとう!! 久瀬！ 恵さん!!」

「わざとやってるの？ 恥ずかしいからやめてよ、上司にさりげなく褒めるみたいなの、そういうのよろしく」

「わかった、じゃあ言っただけ欲しいタイミングで合図して。それでこっちの仕事もお願いいたし

ます」

「何、明日の分もしれっと渡してんの？」

残念ながら明日の分は突き返されたけど、予約に間に合うように帰り支度だ。

どこに恋のチャンスがあるかわからないからね！ と会社を出る前にめぐちゃんは念入りにメイクを直していた。

私は、まあテカリ抑えるくらいでいいかなあ。だってメイク道具ないし……恋のチャンスは……あるか？ いるか？

二人で仕事やダイエツトの話をしながら到着したのは、おしゃれなバル。ネットの写真より雰囲気よくて、一人で外食できない私としてはすごい興奮した。

席に着いておすすめワインを一本と、すぐ出てくるアラカルトを頼む。

お店の内装や窓の外を見てメイン決めるのちよっと悩んでたら、ワインと小さなチーズが運ばれてきた。

今日も頑張ったーってまだ月曜日だけど、とりあえず乾杯。飲みやすいワインを堪能してたらめぐちゃんが口を開いた。

「それで？ 私になんの用ですか？」

「ああ、えっと……」

今日聞きたいのはアレ、こないだの飲み会もだけど、私はちよいちよい記憶なくすくらい飲んでしまってるので、その時の様子なんか聞けるといいなあって思ってます。

はい、もうそろそろ酒の飲み方気をつけます。

で、それ聞くとめぐちゃんはワインをクルクルしながら首を傾げた。

「飲み会の時のえっちゃん？」

私は頷く。

「そうそう、ほら私、お酒飲むとテンション上がっちゃって、気がついたら家帰ってきてるみたいな多々なんだよね。化粧も落としてるし、ちゃんとベッドで寝てるし、苦情もないから気にしなかつただけど、私ってどんな感じ？」

言ったらめぐちゃんにニッコリされる。

「いい年した女がみつともないね☆」

「わかっているから!! 以後気をつけます! すみません」

「まあ、えっちゃんが言うように、ハイテンションになつて笑い上戸じょうとになつてるよ。何話しても笑ってくれるから、おっさんどもに大人気。だから毎回飲み会にも誘われてるんじゃない？」

あんまりおかしなところはないのかなって思いながら、ワインに口つける。

「こないだも、私に甘えてスリスリしてきてたよ。楽しいからいいけどね。でもモテないよねあれは」

「そっすか」

「まあ偉いとは、あんだだけ酔っぱらつてもお持ち帰りされないとかだよね」

「がっ!!」

動揺しちゃってせつかく口に入れたワインを噴き出したんだけど、めぐちゃんはノーリアクションでチーズ切り分けていた。

せせこせテーブルを拭く私に、知らん顔でめぐちゃんは続ける。

「こないだの金曜日はねくまあいつもどおり私に甘えてきて二人で話してて……」

「はじめのほうは覚えてるよ。ビール飲みながら仕事の話してたんだけど、焼酎しゅちゅうと日本酒頼んだとこらへんから記憶が曖昧あいまい」

「ああ、ちょうどそのくらいで席替えでもしようつてなつたんだよ。あの飲み会、全部署来てたでしょ? いろんな部署の人と交流しようつて。そしたら、えっちゃんどこに開発部のお偉いさんが来てさ」

「え? んん……開発つて……あの、毛の薄い」

「ハゲなんていっぱいいるんだから、そんなの特徴になんないつーの。村井むらいさんね。で、村井さんがはあはあしながら、『尾台おしだいさんは下の名前、絵夢ちゃんつて言うんだつてね? 可愛い〜名前だね〜』つて言つて」

「あ、あ、あ……」

う〜ん、なんとなく想像つく。私の名前つてばいつもネタにされるから。

「ニヤニヤしながら、小さな声で『夜もエムなの?』つて聞いてて」

「ヒイイイ………キモい………」

「そしたら、えっちゃんが笑いながら『総務の人お〜総務の人来てえ!!』つて」

「え？」

「助けを呼び出したんだよ」

「なんですって!？」

それはちよつと意味不明すぎて、ワインを一気飲みですわ。

「で、一秒後には眼鏡キラッてさせた人が間に入って、『どうも、総務部袴田です。村井さん、僕の名前はご存じですか？ 僕ユウタって言うんですけど、雄が太いって書くんですよ。確かめてみます?』」

「おおお……おがふとい……」

「……って言って、話題逸らしてもらってたよ」

「へえ……」

めぐちゃんは空になったグラスに真っ赤なワインを注いでくれる。切り分けたチーズは私が苦手なウォッシュタイプを避けてくれてあった。

「そのあと村井さんは他に呼ばれて私も席立っただけど、えっちゃんの隣にはずつと袴田君が座ってくれてたよ」

「そ、そうなんだ……」

袴田君と話した記憶はまったくなくて……ちよつと禁酒が頭を過るんだけど。会社ではほぼ話したことないし、何話したのかとか全然想像できない……とりあえず袴田君ってどんな人なのか聞いてみなきゃ。

「ああ……へえ、そうですか。あー……うーんつと、めぐちゃんって袴田君どう思う?」

「どうって、典型的なメガネイケメンじゃね? しかもいい人だし。だってバイトの私だつて袴田君呼びだよ。なんだろうね、皆が袴田君袴田君呼ぶから呼んじやうよね」

「わかる、年上なのよね。でも総務部ってコミュ力高いイメージあるじゃん? 袴田君は見た目総務部って感じしないよね」

それこそ陰キャっていうか、無口っぽいし、何考えてるのかわからないし。

「そうかな? えっちゃんあんまり話したことないからでしょ? 袴田君忙しくて話しかけんなオーラ」出さないし、声かけたらいつでも手止めて聞いてくれるし、要望も必ず『検討してみます』って眼鏡キラッてさせながら言ってくれるよ」

めぐちゃん、袴田君に詳しくてびっくり。正社員の私が何も知らないのに。

「めぐちゃん袴田君と話すの?」

「うち人事も総務がやってるから、私のバイト面接、袴田君だったんだよ。入社したあとも仕事はどうだとか、無理してないかとか聞いてくれるよ」

「へー……」

そうなんだ。袴田君っていろんなことしてるんだなーとか思っていたら、めぐちゃんが話を続けてた。

「確か袴田君って、私よりちよつと前に親会社の三神企画から来て総務部立ち上げたんでしょ? うちの職場の環境改善のため、だっけ? 威圧的に制することしないし、こんだけ皆から信頼され

て馴染んでるってすごいよ」

「そう考えればそうだよね……はあヤダヤダ。私自分のことばかりで、本当周りを見てないんだなあ」

「そうだそうだ……三年前、三神企画の子会社すべてで行われた社内調査アンケートで、我がGDCの従業員満足度は、数ある子会社を差し置いて、ダントツのワースト一位だったそうだ。」

「従業員の満足度は顧客の満足度にも直結するというので、業績に影響が出る前に職場の環境改善、社内政治を正すのを目的に、三神企画から出向してきたのが袴田君たち、今の総務部のメンバーだった。」

ワインをクイツとしたら、めぐちゃんが止めてくる。

「で？ 袴田君と何があつたの？ 酔っちゃう前に教えてよ」

「え？ なんにも……ないけど……（当社比）」

「いや、隠そうとしても無理だから！ 飲み会後消えた二人！ 翌週現れる袴田君!! 動揺する尾台絵夢!!! いつものえっちゃんなら泥酔しても何食わぬ顔して出勤してくるくせに、『この間何があつた?』なんて聞いといて、何もなは通らんよ」

「わわわわわわわわわわ!! わかりましたから!!」

洞察力鋭すぎるし、正直私もちよつと話聞いてもらいたいしでかくかくしかじか話したら、可愛なお顔の眉間が寄ってしまった。

「はあああ!? 二人で裸で寝てて、何も言わずに帰って、ゲームしてエロ本読んで寝た?」

「違う違う!! TL漫画!!」

「言い方なんてどーでもいいし! どういう思考回路してんの、それ」

「いやだって、袴田君しゃべったことなかったし私処女だったし、テンパっちゃってね? 起きた時の第一声とかわかんないし、寝起きブスだし、でも寝たふりだったって起きるまで何していいかわからないし、寝てる間に屁してるかもしんないし脇の処理も甘いし、股の毛なんて気にもしてなかつ……」

「そんなのどおーでもいーんだけどお!!」

「テール、ドン!! ってされちゃったから、ヒヤアアって手で顔覆いながら言う。」

「だからほらあの、いつもと変わらない日常を送ればなかったことに……」

「なんねえな! こんなことあつた? 服汚してさ、ああ汚れちゃった〜でもいつもどおりに着たら汚れがいつの間にか元どおりに」

「ならねえな!! 汚れは汚れだよ!!」

「お前のしくじりを汚れとか言うな!」

めぐちゃんに、頭に手刀振り下ろされた。う、嘘……先に汚れて言ったのめぐちゃんじゃん!! 話合わせたのにおかしいなって頭さすってたら、めぐちゃんったら男前にワイン飲み干して新しいの注いだあと、きゅつと唇を拭く。それでまだ納得いってないって目で言ってきた。

「どう拗らせたら、そーなんのかわかんないんだけど!? で? 今日袴田君来てたじゃん。なんっ?」

「なんで勝手に帰ったのかって筆談で言われた」

「そんで？」

「責任取るから結婚してって」

「え？ 責任？ は？ えっちゃん妊娠してんの!? エロ本なんて読んでる場合じゃないじゃん！何酒飲んでんの！ 吐け!! 健診の予約しろ!」

ワイングラス奪われちゃった。責任って……

「いやいや、そういう意味じゃな……え？ そういう意味なの!!」

え!? 急に焦りが!!

「知らないし……まあ妊娠してたとしても、昨日今日でしかも袴田君がわかるわけないんだから、エッチしちゃったことの責任だらーけどさ……」

「……だよね」

エッチしちゃった、か……おかしいな……自分のことなのに妙に実感湧かなくて……意味もなくジェルネイルのはがれるとこ気になる、ガリガリ。

それ以上答えないで爪弄^{いじ}つてたら、はいはいどうぞってグラスを返された。めぐちゃんは面倒臭そうな顔で言う。

「で？ どーすんの、付き合うの？ えっちゃん気になる人いないでしょ」

「え、気になる人？ 気になるっていうか……営業の桐生さんは常々一般的にいいなとは思ってるよ」

「桐生さん？ 成績トップの？ うへえ。取り柄もない拗^{こむ}らせアラサーが理想はつか高くてウザー」

「うるさいな、気になる人いるかって聞かれたから『桐生さん素敵だね』って言っただけでしょ。なんとも思っていないし」

「はあ？ そんなこと言って、朝隣で寝てたのが桐生さんだったら、今頃彼女^{かのじょ}面^{めん}してたんじゃないの?」

「すいまっせーん!! 同じワインもう一本くださいーい!!」

なんだよ、人の心を読む力でもあるのかよ久瀬恵! 怖すぎる! 怖すぎるので聞こえないふりして、チーズ食べてワイン飲む! 生ハムも食べてワイン飲む!! オリーブ食べてワイン飲む、ワイン飲む!! 飲む! クラクラする!!

めぐちゃんは冷たい目でワインを傾^{かたむ}けながら溜め息ついている。

「あーあーあー……いい年した女が、どうしてそういう逃げるようなお酒の飲み方しかできないわけ? まあいいよ、袴田君と付き合わなくてもさ、ちゃんとしつかりした理由で断りなよ」

「ん?」

「だって袴田君って、絵に描いたような草食系じゃん。受付のギャルちゃんたちがああいう眼鏡^{めがね}君好きみたいで『休みの日遊びましょよ☆☆』って媚^こ媚^こびしたら、袴田君眼鏡^{めがね}キラッてさせながら、『休日には趣味に没頭したいので。今は女性には興味ないんです、ごめんなさい』ってキッパリ断ってたよ」

「へえ〜」

「それなのに、何故かえつちゃんには心許したんだからさ」
「うん」

「ゲームとエロ本に夢中で手が離せません、とかなしだよ」

「わかってるよ！ 中学生じゃないんだから」

「袴田君いい人だし、いちおし物件だよ。付き合ってみたら？」

私のほうがめぐるちゃんより年上なのに情けないなまったくもう!! ……って一気にゴクゴクやっていたのが効いたのか、ちよつと楽しくなってきたなハハハ。

「いやいや、付き合うって私たちお互いのことふふふふ、まだ全然知らないしへへへ。そーだよなーんも知らないもんアハハハハハ」

「あれ？ そんな飲ませたかな」

「全然飲んでないよオホホホ。それにしてもドジっちゃったんだなあー。袴田君ちにポーチ忘れちゃってハハハドーしよ、返してほしーへへ」

「ふうん？ じゃあ連絡しとかないとね。まあとりあえずお酒はそこまでにしときなよ」

「え、なんで！ やだーまだ全然飲んでないのにーフオフオフオ」

……ってそこらへんまではハッキリ記憶にあつて、そのあとすっごい美味しい苺とリンゴのマリネ食べてワイン進んじやったのまでは覚えてんだけど。

「んっ……」

気持ちいい揺れで目覚ましたら、車のガラス窓に寄りかかっていた。

え？ 何？ 車？ この匂い……は、ああ、タクシーかな。

まだうつらうつらしちゃう。んつと……胸のどこジャケットかかっている……手温かい……温かい？ ん？ なんで？ え？ に、握られてる！ 誰!?

手ぎゅってしたら、窓の外見てる人がこっちを向いた。やだ、その顔……暗い車内で眼鏡めがねがキラッって光ってる。

「起きました？」

「はははは袴田……くく？」

「はい、袴田です」

「お、お疲れ様です！」

「お疲れ様です」

「ななななななで!？」

「会社に残って仕事をしていたら、久瀬さんから上司が酔い潰れたと電話があつて」

「ええ………ああ!! あのすみません」

「いえ、大丈夫ですよ。運転代行の手配とか二次会の場所とか……割とこの手の仕事もするんで」

「はあ」

「ああでも」

袴田君は握ってる私の手を自分の口のどこまで持っていくと、甲にちゅってしてきた。

「ビヤッ!!」

「さすがに、店まで迎えに行つてタクシーに同乗して、手繋ぐなんてしませんけど」

「へ？ あ！ ごめんなさい！ あの、謝るので手離してもらつてもい……」

「ダメですよ」

「どして」

「今度は“お先に失礼します”って勝手に帰られたくないですから」

袴田君、にやつて口角吊り上げてる。

「ヒゲッ」

袴田君って笑うんだ！ しかもあの、なんか怖い系の笑い方。

手揺らしてみる。引つ張つても離してくれないから！

「えっと、あのこれつてどこに向かつてますか？」

「家、ですけど」

「いえ？」

「俺の」

「降りる降りる降りる降りまっす!!」

無理だし！ と手振りまくるけど、強固すぎて外れません!! 効きませんね、とでも言うように

袴田君は笑顔を崩さずに言う。

「化粧ポーチ、いいんですか？」

「あ」

「動揺しているのは重々わかるんですが、逃げてばかりじゃ何も始まりませんよね」

「だって怖い……これから何が始まるんですか」

「逃げたり、目を伏せたり……自分の視界からなくなれば解決したと思う、尾台さんの間違つた認識を改めることができると思います」

「おおおおお！ なんか袴田君先生っぽい」

そうしたら袴田君、眼鏡キラッてさせて言う。

「いえ、総務です」

「総務格好良すぎじゃないですか!」

「尾台さんだつて格好良いですよ、うちの営業が外でのびのびと仕事できるのは、他でもない事務さんのフォロワーあつてこそですし。尾台さん評判いいですよ」

「え？ え？ そうですか」

あ、やだ。仕事褒めてくれたら、この人いい人☆ とか思つちゃう私、チョロイぜ。怖いゲージが下がつて、ちよつと話に耳傾けちやつたりなんかする。

「尾台さん、納期は必ず守つてくれるし、資料にミスも少ないし、無理な注文も聞いてくれるって営業の人言つてましたよ。頑張りすぎるのは心配ですけど、残業もしないように自分で仕事量調整してるし、素晴らしいと思います」

が、褒められ慣れてないせいで、いい返しが思いつかず、すぐ辛くなる不思議。

「ああ……あの……もういいです、恥ずかしくなってきました」

「あと、うちにそんな風習はないのに、社内文書の時は少し左に傾けて捺印してますよね。逆に社外の契約書で、尾台さんの印鑑が掠れているのを見たことがあります。いつも綺麗に真っ直ぐ、色濃く力強く押されています。どっちも好きですよ」

「ああ……ハンコ……上司にお辞儀してるみたいに見えるからいいって聞いてやってました」

「そっか……契約書は、私のハンコが掠れてたらお客さんが不安になるかなって、気合い入れて押してました」

「好きですよ」

「う」

さつき一回言われて流したんだけど、袴田君はもう一回言ってきた。

「好きです、尾台さんのそういうところ」

三回言ってきた。

でもなんて返していいのかわからない。袴田君は答えない私に何も言わなかった。

いまさら手繋ぐの恥ずかしく思えてくる。相変わらず手を離してくれないから、ちよつと気まずくなつて外でも見ておいた。

ハンコなんてもう癖になつちよつて気にも留めてなかったんだけど、そんな小さなところでも気がついてくれる人がいるって嬉しいなあ。

でも、私だけ特別ってわけじゃないよな、仕事の一環？ めぐちゃんのことにも気にかけてるみた

いだし。

そしたらクイクイと手を引っ張られたから、袴田君のほうを見る。

「仕事、辛くないですか？」

「え？」

「仕事内容ではなくて、人間関係とか」

「人間関係……」

「まだまだ古い体質から抜け切れてないですからね、うちの会社。俺は尾台さんの力になりたいの
で、なんでも言ってください」

あつもしかして、朝の葛西さんの件かな？ えつ、気づいて助けてくれた……？

「あの……今日はありがとうござい、ました？」

「いいえ。だって俺の用事のほうが重要だったでしょう？」

袴田君はくすつて笑う。そしたらドキンつてあれ……なんかちよつと……あれ、変な動悸……してる？

胸の鼓動が今まで感じたことのないくらいでどうしていいのかわからない。

「御茶ノ水で、尾台さんのおすすめのお店はありますか」

沈黙して固まったら、袴田君が話を振ってくれた。

私は昼お弁当持参だし、そもそも外食が苦手なんだ、とか逆に袴田君のおすすめのお店の話したら………ヤ、ヤバイ、いつの間にかタクシーが停まっていた。

お金を払おうと思ったのにカードを出されてしまおうし、先降ろされちゃうので、何もできなかった。

目の前にそびえる建物を見上げる。高級そうな高層マンション……帰るなら今しかないよなって思った。時間は午後十一時になるところ、よかつたまだ今日だ。

どうする？ どうする私!! このまま男性の家に上がるってどういう意味なのか、わかっているのか私。でも結局、新しいメイク道具買ってないし、返してもらえたら返して欲しいよな……

袴田君、めぐちゃんの話とちよつと一緒に話した感じでは、いい人っぽいけど……

エントランスに行くまでの植栽すごくて、わざわざ生えちやつてる、なんのため？ とりあえず花壇の縁にちよつと腰下ろす。袴田君はジャケットの袖に腕を通しながら首を傾げた。

「どこか具合でも悪いんですか」

「ああ……つと違くて」

「どうしました？」

なんていうか、私はこういう場面って経験ないから、すべて書物の知識なんですけど……でも曖昧が一番よくないから!

心配そうに顔を覗き込んでくる袴田君に、できるだけ真剣な顔で言った。

「仕事もプライベートも時短推奨のため、単刀直入に言わせてもらいますと!」

「はい」

「袴田君は私に下心がありますか!!」

「え」

「だって、私がすすすす好きなんですよね？ 今家に行ったら押し倒されたりするんでしょうか! 私にはそんな気ないんですが、世にあるTL漫画等では、のこのこの男の部屋に入ったが最後、組み敷かれ抵抗すると『はあ？ お前男が一人で暮らしてる家に入ってきたといて、いまさらそれはねーんじゃないの？ お前だつてこうされたいんだろ？ ほら顔真つ赤だよ？ ん？ 欲しいんだろ？ おねだりしてみろよ』って言われるんですね! 私は本当にポーチを返して欲しいだけなのですが、袴田君は件の『はあ？ お前男が一人で暮らしてる家』男子なのでしょいか! もしそうだとしたら、私は男の人に性欲があるのは当たり前だと思えますし、男の人が性欲ないと人間が絶滅してしまうので、性欲があるのはいいことだと思います! なのでその場合、私は袴田君の性欲がおさまるまで、ここで大人しくポーチ待たせていてもよろしいでしょうか!!」

めっちゃ早口で言ったら、袴田君は口開けながら聞いてたけど、後半は笑っていた。

「ふふふ、いいよ。尾台さん素直でいいですね、何回性欲って言うの。大丈夫です。下心は理性総動員で抑えるので、お茶でも飲みませんか」

「飲みません! 私の読むTL漫画ではそのような時のお茶には大体媚薬が含まれています! 飲んで数分すると眩暈がして『あれれ? どうしたの? ああ……お薬効いてきちゃった?』って押し倒されます!」

「尾台さん急に癖が出すぎだから。普段どんな漫画読んでるんですか、純愛系にしましょうよ」

ね? 行きましよう? って袴田君は手を握ってきた。「ほらこれアカンやつやないの!? 男は

狼なんやで！」と心の中で謎の大阪のおかんが言ってくる（東京都出身）。

でも大きな手でガツチリ握られて、迷いのない袴田君の真っ直ぐな足取りに、そのまま連れていかれてしまった。

「何もしいって約束してくださいね」

「しますします」

「絶対ですよ！」

「ですよ」

一つ目のセキュリティーを抜けると、大理石のエントランスには鮮やかで見事な花が置かれてた。こんな時間でもコンシェルジュいて、その横を通過するにはまたセキュリティーカードが必要で……

これ軽い要塞じゃないですか！ 一度入ったら逃げられないぞ絵夢!! やっぱすごい緊張してきた！

不安で手引つ張ったら、袴田君顔傾けてきて笑顔。あれこの人こんなイケメンだったっけ。つべつにお金持ってそう！ とか思っていないですよ!!

家の中に案内された。お靴ちゃんと揃える。

「あれ、綺麗」

あの朝はカーテンが閉まってて電気もついてなくて、散らかってるってイメージだったんだけど、通された部屋は片づいていた。リビングだから？

「寝室も綺麗ですよ、ほら」

袴田君は隣の部屋のドア開けた。うっひょ!! そこ、こないだ起きたベッド!! あ、でも綺麗。

「片づけたんですか」

聞いてみたら、袴田君はちよつとムツとした顔になった。

「そうですね、っていうか、あの日荒らされたんですよ」

「え」

「尾台さんが家に着くなり『総務ってこんないどこ住んでんのおお!! キイエエエエー!!』」

「ひいひい……!!」

「嘘です、いろいろあつてって感じです。まあ気にしないでください、何も壊されてませんから」

「いや、そういうわけには」

でも怖くてその日のこと聞けない、死にたい。

「ささ、座ってください」

「土下座でもいいですよ」

「それじゃお茶飲めないでしょう」

肩押されて腰下ろす。袴田君はキッチンに向かった。

グルッとお部屋見てみる。おしゃれな間接照明あるし可愛い形のデイフューザーあるし、植物あるし壁には写真がいっぱい飾ってある。ブラックライトの水槽に……あ、なんか音楽かかり出ました！

「何ここ、ラブホみたい！」

思わず言ったらポットに火かけてた袴田君が眼鏡キラッてさせた。

「褒めてますよね？」

「はい、そのくらい素敵って意味です」

「ラブしてしまいうくらいムードがあつて素敵？」

「ラブ？ ムード……？ ああムード………」

ヤッベ！ なんてラブホとか言つてしもたんやるか！ 混乱したら袴田君たたみかけてくる。

「尾台さんはラブホにはよく行かれるんですか」

「え？ あ、はい！ ふ、ふふふ二日に一回は」

「じゃあ明日行くんですか？ へえ昨日は誰と行つたんですか？ え、もしかして今日今から」

「嘘です行つたことないです」

「お疲れ様です」

「お疲れ様です」

袴田君はカップにお湯を注ぐと、茶葉の入った筒と一緒にトレイに載せてこっちに運んできた。

それでその筒を渡してくれる。

「高そうですね、釘が打てそうな缶！」

「王室御用達の紅茶みたいですよ。いただきものですけどね。尾台さん、コーヒーより紅茶派ですよね？ デスクにティーバッグ置いてあるし」

「はい紅茶派です。コーヒーってあと引くじゃないですか。スッキリするけど、どんどん飲みたくなるストレスが半端なくて、やめました」

「へえ。ストレスを緩和するコーヒーにストレスを感じるんですね」

高そうな茶筒を眺めてたら、袴田君は「もしよかったら帰ってください」って言ってくる。

マジで？ ほしーけど、私そんな物欲しげな目で見てたかな！

カップを手にとると、銭湯みたいな富士山のタイル絵が描かれていた。袴田君の趣味？ 高級な

紅茶にミスマッチなカップだけど、可愛いからいいか。

カップを口まで持つてくると、湯気から高級そうな香りしてる!! あー！ でもそうだ。

「忘れてた。袴田君一口飲んで」

「毒見ですか？ いいですけど間接キスになるし、もし媚薬が入っていたとしたら、俺とんでもないことになりませよ」

「ひよわ！」

「ふふふ毒なんて入ってないですから、普通に飲んで？ 俺も同じの飲みますし、ほら」

ってカップをカッンってされたあと、袴田君は先に紅茶に口をつける。のど動くところまで確認

して聞いてみた。

「美味しいですか？」

「うおおおとおおお!!」

「ええええええ!!」

突然、胸掴んで呻き出した。なななな何!?
と思ったら、真顔に戻って眼鏡直してる。

「嘘です」

「もう帰っていいですか」

「ダメです。はい尾台さん、まずこれポーチです。どうぞ」

いつの間にか袴田君の手には私のポーチ。どっから出したんだ。

「ああ……はい、ありがとうございます」

なんなんだよ袴田君、どういう性格なんだよ袴田君。でも悔しいことにそんなので緊張が解けて、紅茶を一口飲んだ。

ふああ……いい香り。やっぱり美味しくてほっとしてたら、袴田君は私見て安心したように口端を緩ませた。

「それで……」

袴田君は紅茶を飲みながら言う。

「はい？」

「それでラブホ云々は、『私ビッチなのよ作戦』ですか」

「してませんけど」

「なんだ、てっきり俺からのプロポーズ断りたくて、ビッチを演じてるのかと思いました。『あんなふうに男と寝るのなんて、鼻毛抜くくらい私には日常茶飯事なのよ』みたいな」

「鼻毛は剃る派です」

「俺ワックス派です」

「痛くないんですか」

「最初はビビりましたが、慣れると快感です」

「へえやろうかな」

「ネットで買えますよ。へえ尾台さん話逸らすの上手ですね」

「え？ 逸らしてましたか、鼻毛の話振ってきたの袴田君でしょ」

「そっか、じゃあ本題に戻しますね」

「戻さなくていいですけどね」

紅茶飲みながらカップ越しにちょっと睨んでみたら、袴田君はまさかの真剣な顔で。

「尾台さん、好きです」

まったく、一切の動きを許されずに私の体は固まってしまっ

「あ、ちょっと尾台さん紅茶ブクブクしちゃってますよ、カップ下げて」

「すみません」

カップを取られてテーブルに置かれてしまったので、手持ち無沙汰で髪結わく。そしたら袴田君がじっと見てきた。

「あれ、お仕事モードですか」

確かに、仕事する時はいつも髪結んでる。よく知ってんな……

「そういうわけじゃないんですが。のこのこやって来た手前言いにくいんですけど、袴田君と話すこともないし、気まずいなと思ってます」

「そうですか、じゃあそんな気合いの入ったお仕事モードの尾台さんに、一発ポンと」

袴田君、紙出してきて言う。

「署名捺印なつげんお願いします」

「これ婚姻届なんですけど」

「ええええ!? これ婚姻届なんですか知らなかった! 初めて見た!!」

言いながらすっごい覗きぞ込んでるけど、夫になる人の欄記入済みだし。何この茶番。

「袴田君って周りからの評価を聞くときごく信頼されてるし、仕事もできる人だし、その上草食男子みたいになってるんですけど、実は変な人なんですか。これは煽おほってるのではなく、本気で心配してるんです。突然女性に婚姻届突きつけるって、されてるほうは恐怖ですよ」

「恋の病にかかってしまったもので」

「眼鏡めがねキラッてさせてますけど、ますますおかしい人です。どうしてこんなの持つてるんですか、しかも袴田君の名前書いてあるんですけど」

「はい、今すぐにでも俺は籍を入りたいので」

両手に持つて見せてくるんだけど、え? なんで? っていう疑問しか浮かばないんですが。

ずいっと迫られる。これはその、押し倒されてはいないけど、違った危険を……!!

「ちよつとあの、袴田君はなんで私と結婚したいんですか」

「尾台さんが好きだからです」

「でも私たちって接点なかったじゃないですか」

「何言ってるんですか。俺たちはもう接点どころじゃないでしょう?」

ワンナイトラブかと思いきや、袴田君思ったより本気なただけど……でもこのまま結婚っておかしいもんな。

ちよつどいい! 髪も結わいてるし自分の酒癖の悪さもわかったし、ここはひと思いに土下座しよう!

そうだよね、むしろはじめからそうするべきだったのに、逃げていたんだ。ありがとう袴田君、目を逸そらしていた現実に向き合うことができました!!

「尾台さん?」

袴田君心配そうにこっち見てくる。

私は今から袴田君に三つ指ついて頭を下げるのです。深呼吸して頷いた。

「まずは、ありがとうございます。飲み会で、袴田君が私を助けてくれて、ずっと傍にいてくれてたつて今日聞きました。そして一緒に寝たつてことは、そのあと袴田君は私に付き添つて介抱してくれたつてことですよね。それなのに何も言わずに帰つてごめんさい。言い訳はしません、みつともない限りです。本当にご迷惑をおかけしました」

「はい」

静かな返事に私は顔を上げる。眼鏡めがねの下で灰色の瞳が真剣に私を見ていた。ちよつと怯ひるんだだけ

立ち読みサンプル
はここまで

ど、気を引き締めて続ける。

「嘘をついても仕方ないのでハッキリ言います。私たちは男女の関係にあるのかもしれませんが、私にはあの日の記憶がありません」

「はい」

「だから」

「はい」

「だから……あの日をきっかけに袴田君が私を好きになって結婚したいと言っているなら、私はそれに誠実な気持ちでお答えすることができません。すぐく身勝手だし、女として最悪なんですけど、でもそんな気持ちで結こ……んんん……っ」

上手に言えたと思っただのに、待つて！ なんだ!!

袴田君が私の口を塞いでいる、よりにもよって口で!!!!

「キスした記憶もありませんか?」

「あ、なっ……に、ないですよ」

「じゃあこれが尾台さんのファーストキスですか?」

ちよつと離れて聞いてきて、また唇重ねてくる。

「んん!」

「じゃあ今日は俺のキス、覚えて帰ってください」

「あッ、や」

体抱き寄せられて骨キシキシいつてる怖い! 近い!! 婚姻届グシャってなってる!

でもなんでか落ち着く匂いする。香水? 柔軟剤? 嗅ぎ慣れた匂い。

思わずくんくんしてたら、袴田君耳元で囁いてくる。

「どんな答えでも俺は尾台さんが好きなんですけど、その答えはさらに好感度大です」

「え? え? 何? 私お断りしてるんですけど!」

「はい。『今のままじゃ私は真剣になれないから、もっと本気でぶつかってこいよ袴田!』ってことですよね?」

「は?」

「酔っても記憶に残る男になれよ袴田! お前の気持ちはその程度か袴田! 私の初めての男にな……」

「言っけないよ袴田!!!」

袴田君ぎゅっしてちゅっちゅしてきて、ヤダヤダヤダヤダ!!!

「袴田君離して!!」

「ああ、そういえば」

両手取られて引つ張られて、私の手握ったまま、袴田君後ろに倒れちゃった。私が押し倒してるとなりたいなんてるんだけど。

「好きな人に押し倒されるって最高ですね!」

「何がしたいんですか、私がしたんじゃないでしょ」